

「角堂浜と中の島」

「往時の住道駅前の風景」



河内平野を南流する寝屋川と北流する恩智川が合流するJR住道駅の北側には、かつて角堂浜といわれる船着き場がありました。江戸時代中期（18世紀ごろ）から、角堂浜には貨物船や野崎まじりの屋形船などが集まるようになり、運送業者や料理屋などが軒を並べ、とてもにぎわったそうです。現在寝屋川の護岸堤防沿いにひっそりと立つ住吉神社は、水上交通の無事を願って、角堂浜に建てられたものと考えられます。

明治22年（1889）、町村制の施行にあたり、角堂浜を中心として栄えた三箇・御供田・灰塚・尼ヶ崎・横山・川中新田の各村が集まり、住道村となりました。「角堂」の字を改めた「住道」の地名はこの時にできたものです。明治28年（1895）には、浪速鉄道（現在のJR学研都市線の開通により住道駅ができ、次第に陸上交通が発達して

いきますが、自動車普及し始める昭和の初めごろまで、寝屋川の舟運は大阪と北河内を結ぶ重要な交通・輸送手段でした。

ところで、角堂浜のすぐ西にはかつて中の島といわれる東西に細長い砂州があり、明治29年（1896）、この地で河州煉瓦株式会社（河州煉瓦）の工場が操業を開始しました。翌年の打上トンネル（現在のJR東寝屋川駅付近）建設の際に百万個のレンガを納入していることから、かなりの生産力を持つ工場だったと考えられます。河州煉瓦は短期間で撤退しますが、その後も一時期、土管製造工場などが操業していました。中の島は、昭和50年代の寝屋川護岸工事で取り除かれ、現在は往時の面影は残っていません。

年月がたち住道駅前の風景は様変わりしましたが、大東市の玄関口として現在にもにぎわっています。

（生涯学習課）



大正時代ごろの角堂浜（中の島付近）



住吉神社の祠